

ゴールド・コースト自然紀行

——サーファーズ・パラダイスにて——

息子の中学受験も終わり、わたしたち家族は、3月末にオーストラリアを訪れた。不思議に今までオーストラリア関係の仕事がなく、初めての訪問である。

初日、わたしたちは夕方までゴールド・コーストで海水浴を楽しんだ。南半球なのでもう初秋であるが、紫外線は日本の3～4倍で、サングラスは必須である。

強い潮風が吹き、潮の香が満ちてくる。東京では今頃は花粉症で苦しんでいる時期だが、ここは別天地。ここはサーファーズ・パラダイスとも呼ばれるほど、サーファーにほどよい風が吹き、波が打ち寄せる。

やや季節はずれなので、泳ぐ人も数十人ほど。遠くにはサーフ・ボードや、カヌーを楽しむ人も見える。海は遠浅で、遠くの地平線がわずかに丸味を帯びて見える。白いヨットが横切り、赤と黒の複葉の水上飛行機が青空に舞い、時折、赤と黄色のヘリコプターが「バババババ」と音を立てて飛び交う。

地平線の彼方から天頂を経て半球を描き、紺碧の空に一条の飛行機雲を描きながら、飛行機が飛び去る。

妻とわたしは砂浜に陣取り日光浴。ふだん口喧嘩の絶えない娘と息子も、くり返し押し寄せる波と戯れ、「キャーキャー」と久しぶりに童心に帰る。高校生と中学生にしてはちょっと幼い気もするが……。

ズズーン、ズズーンと白波が砕けた後、ザザー、ザザーと潮音が続く。押し寄せる波は強からず弱からず、ちょうどジャグジーに入っているように心地よい。子供たちの脳からは、 α 波がガンガン出ていることだろう。

海の色は多様である。砂浜に近い所は薄い砂葉色、その向こうに白波が砕け散り、その向こうはエメラルドグリーンとライトグリーン、そのまた向こうは群青の海が広がっている。群青の海の果ては地平線で、丸味を帯びた地平線の上には浅い雲が広がり、雲の上は深い紺碧の空が広がる。

季節もほど良く、人出もまばらで、まるでプライベート・ビーチにいるような贅沢さである。

——土ぼたるナイト・ツアー——

オーストラリアには日本人観光客が年間80万人も訪れるため、日本語の観光ツアーが数多くある。やはり細かい話は日本語に限る。早速申し込み、その夜は「土ぼたるツアー」に出かけた。20人ほどの観光客は、全て日本人である。

ゴールド・コーストから1時間ほどバスで行くと、スプリングブルック国立公園に着く。そこから漆黒の闇の中を、懐中電灯を頼りに小径を歩いてさらに20分ほど。土ぼたるが生息する、小さなプラネタリウムほどの洞窟に着く。土ぼたるを驚かさない様に電灯を消し、洞窟の天文を見上げると、数千の土ぼたるが、ブルーサファイアに輝いている。それはまるで太古に満天の星空を見る様な神秘的な美しさ。観光客は、しばしその美しさに時を忘れる。

土ぼたるとはいうが、英語ではGlow Wormといい、ほたるとは何の関係もない。昼間見れば、みの虫に似た数センチの虫である。それにしても「土ぼたる」とはうまい名前をつけたものである。観光客向けに誰かが考え出したのであろう。そうはいっても闇の中にブルーサファイアが浮かび上がる幻想的シーンは、一見の価値がある。

2時間ほどの土ぼたるツアーの帰途、丘陵地を通ると「あの丘の上に輝くのが、南十字星です」と、バスガイドが右手前方を指さす。

「オー」周囲から、一斉に歓声が上がる。南十字星（サザンクロス）は、ケンタウルス座の α 星と β 星の近くにある、4つの星である。星をクロスさせて結ぶと十字架の形に見えることから、南十字星と呼ばれている。南天の天の川の中にある小星座で、3個の1等星と1個の3等星からなる。英語ではSouthern Cross。何とも美しく太古への郷愁をそそる名前である。

中学生の時、わたしは天文クラブで、深夜よく流星観察をしたものだった。深夜の数時間、空を観察していると、数十個の流れ星を見ることができる。その当時の秋田の空は澄んでおり、満天に輝く星を見ることができた。南十字星は、沖縄諸島の一部を除いて、日本では見えない。南十字星を見るのは、わたしの長い間のあこがれだった。

今、思いもかけず、その南十字星が輝いている。時間が早いせいか、十字架は直立しておらず、斜め左に傾いている。星を見つめていると、いつかSFの世界にはまってしまう。

お父さんが、初めに地球に降り立った所は、ちょうどあの丘のような所だったんだよ……。

わたしが、エイリアン気取りで息子に語りかけると、ヨシ坊も心得たもので、
僕はそのあと、地球で生まれたんだよね……。

と話を合わせる。

わたしたちの声が大きかったとみえ、前のバス席に座ってかしましく話をしていた年配の女性客たちが、急に話をやめこちらを振り向いた。一瞬ギョッとしたらしい。
妻や娘は、わたしたちのナンセンス・ジョークには慣れているが、彼女たちには通じなかったようである。

バスは小休止して、南十字星を心ゆくまで見る事ができた。まさか南十字星に出会えるとは思ってもみなかったので、三脚を準備して来なかったのが失敗だった。10枚ほど写真を取ったが、全部ブレて折角の思い出も台無しである。

——釣れた！大魚バラマンディ——

翌日、わたしたちは、オプション・ツアーのバラマンディを釣りに行った。ガイドは日本人で、数年前まで日本でバスプロをしていた。オーストラリアに魅せられて移住し、今は主に日本人のために、カジキ釣りなどのガイドをしている。家族のためのガイドは、時々時間があいている時の余技らしい。

バラマンディは、何科の魚かわからないが、サーモンを小型にした様な魚である。釣場は、ゴールド・コーストから40分ほどの、日本流にいうと、管理釣場のような所である。
釣りキチの不動産業者が、自分の農場の一面をつぶして、バラマンディ用の釣場をつくったという。小学校のグラウンドほどの広さだから、沼といってよい大きさである。
わたしたち家族以外には、誰もいない。わたしと娘と息子はルアー釣りで、妻にはガイドがわざわざ生き餌をつけてくれた。

こうして釣ること20分、早速、妻にヒットがきた。釣りには全く素人の妻は、激しい当たりがガンときたので、沼に引きずり込まれそうになりあわてている。
ガイドが、「腰を引いて、落ち着いて、少しづつ引っ張って……」といいながら手伝ってくれるが、なかなか上がらない。大きな魚影が、沼の中に踊っている。妻は管理釣場で小さいヤマメを釣ったことがあるが、こんな大物は初めてとあって及び腰である。
ガイドも手伝ってくれて悪戦苦闘10分近く、やっと引き上げたバラマンディは、見事な銀鱗を輝かせる60センチ近くの大物である。

大物が釣れたので、わたしたちも目の色を変えたが、なかなか当たらない。釣りキチを自認するヨシ坊も「やっぱり生き餌にはかなわないよなあ……」とクサリ始める。

そうはいうものの、30分ほどして息子にもヒットがあり、大物と闘うが、ついに途中でバレてしまう。わたしと娘には何の当たりもなし。ただ夕闇せまる水面を見つめ続けるばかりである。

ところが、妻はその後も順調に大物のバラマンディを釣り上げ、2時間の間に計4匹。その合間には、直径10センチを越え、長さ7、80センチの巨大なウナギまで釣り上げる有様。思いがけない釣果に、妻は大満足だが、わたしたちは燃焼しきれないまま、釣場を後にした。

こうして休暇はどんどん過ぎ去った。気が向けばサーファーズ・パラダイスで泳ぎ、ドリーム・ワールドでコアラやカンガルーと戯れ、パイオニア・プランテーションのバナナ園を見学し、オーストラリア最東端のバイロン岬で美しい海岸線を楽しんだ。

その他にも砂金採り、羊の毛刈り、マリンスポーツ・ツアー、亜熱帯雨林観光、4WDを駆って谷や小川を渡るブッシュ探索ツアーなど、やり残した楽しみは数多い。

最初は「オーストラリアなんて」と渋っていた息子や娘も、いっぺんにファンになってしまった。はじめてのゴールド・コースト紀行は、まさに自然紀行であった。